



思い出の山道

日野市 中島 孝子

立春も過ぎたというのに、雪が降ったりして寒い日が続いております。さぞやお山は寒いことと思います。

昨年、八王子市市制百周年記念事業の一つで、八王子市夢美術館において実施された「市民公募はちおうじ」に出品したところ、和紙絵画の「山道」という作品が入賞いたしました。高尾山をモデルとしましたので、記念として薬王院に奉納させていただきました。私にとって山道というのは、高尾山の山道です。

戦時中、私の一家は八王子空襲を受けて、八王子市内から疎開し、母の背中で高尾山麓の橋詰亭にお世話になりました。

この家は母方の祖母の妹の家で、そのおばあ

ちゃんの手合でみんなが動いていたようです。当時はその家で、橋詰亭の三人、私の家族の五人、もう一大家族二人の、計十人が暮らしておりました。家がとても広かったことを覚えております。

橋詰亭にお世話になっていた時は、父は会社へ、長姉は第四高女へ、次姉は第四小に通っていました。私はやっと四歳になった頃でした。橋爪亭の孫は三歳で、いたずら盛りでした。

橋詰亭のおばあちゃんは、私とその子の二人を連れて「お山に行こう」と言って、リヤカーを引いて山道を登りました。風呂や籠の焼き付けのために子供二人に杉の葉を回収させて、自分は木の枝を拾っていました。十人が風呂に入るの

たくさん燃料となる木材が必要で、天気の良い日は毎日行っていたと思います。今思えば良い運動になったし、喧嘩もせずに一生懸命お手伝いをしたのだと思います。

私が山を好きになったのは、毎日のように杉の葉を頂くために山道を行っていたからだと思えます。山道への道は、家の前からケープルカーに向かい、小さな橋を渡りすぐ右の方へ、そして少し行くと左の方へ行く。私は山道と聞くと、この道順が頭の中に浮かびます。

おばあちゃんと叔母さんは毎日、「良い日です。お山はとて大切なところだと教えられました。私にとつて山とは高尾山です。そして中でも、今は一号路と呼ばれている道、私が杉の葉を拾ったこの山道こそが私にとって大切な思い出です。

たかさん燃料となる木材が必要で、天気の良い日は毎日行っていたと思います。今思えば良い運動になったし、喧嘩もせずに一生懸命お手伝いをしたのだと思います。

二年程で八王子市内に戻りましたが、夏休みになるといつもおばあちゃんの家にお世話になりました。そしてやはり、お山に行つて杉の葉を拾っていました。この仕事は子供の仕事でしたから、子供でもちゃんと仕事をするとつてお話を教えられると思えます。最近では高尾山になか

なに行けず、おばあちゃんも叔母さんもおの子は元気でやつてるかな、と心配をかけていると思いますので、近いうちに墓前に挨拶に行こうかと思つています。



市民公募はちおうじ入選作品「山道」
奉納頂いた作品は薬王院方丈殿に展示中

おはなし散歩道

ポン太とポン子

町田市 大澤桃代

タヌキの夫婦がいました。ポン太とポン子です。ポン子は小さく弱かったため親から大切にされました。そのせいか、少しわがままです。ポン太は穏やかで、そんなポン子を愛おしく思っています。

ある夕暮れでした。

二匹は峠から村を眺めています。村はもう芽吹き季節でした。

ポン子が言いました。「キャベツが食べたいわ。村へ行きましょ」

「もう少し待とう。山にはまだ雪があるよ」

「いやよ。木の実なんてもう飽き飽きだわ」

ポン子は言い出したら聞きません。そして、食べ物を用意するのはポン太の役目です。

「仕方ない村に行くよ」
ポン太は言って、山を

下りました。案の定、山はぬかるんでいて何度か滑りました。それでも夜の畑でキャベツを見つけた。

夜更けにポン太が山へ戻ると、

「わあ、キャベツ！」と、ポン子は新鮮な葉っぱに飛びつきます。

ポン太はそれから、たびたび村へ行きました。ポン子の喜ぶ顔が嬉しかったのです。

キャベツばかりでなく、神社に供えられたお団子や饅頭、稲荷ずしも持ち帰りまして。ポン子は子供がとてても気に入ったようです。

山にも春がきました。「もう村に行けるわね。あたし神社へ行きたい」

ポン子が言いました。「でも……とポン太は言いかけてました。嫌な予感

がしたのです。「行きましょ、よ」
ポン子に上目遣いで見詰められ、ポン太は何も言えませんが、その目に弱いのです。

晩方、二匹は村へ下りて行きました。ポン子が滑らないように、ゆっくり歩きました。星の瞬く頃、神社に着きました。いい匂いがします。稲荷ずしです。

「これが一番好き！」
ポン子は夢中で食べています。彼岸桜の花びらがポン子の頭に落ちます。その姿を見て、ポン太はきてよかったんだ、と思えました。

そんな二匹を見ていた人間がいました。二匹は何回か神社に行きました。けれど稲荷ずしは食べられません。「つまらない」とポン子は膨れていました。

あるとき、ポン太が目覚めるとポン子がいません。すみかの回りの餌場も探しましたが、やっぱりいません。

ポン太は急いで村の神社へ向かいました。他に思い当たるところがなかったのです。でも、ポン子は見つかりません。いつまで待っても戻りません。

やがて、ポン太は村に行くこともなくなりまして。

ある日暮れでした。ポン太は、山菜取りの村人の話を聞きました。

「神社に可愛いタヌキが住みついでおるの」

「ああ、あの愛想のいいタヌキじゃな。初めは社務所で、今は緑の下をすみかにしどる。神主が餌付けしたがね」

緑の下には葉が敷いて

あるそうです。

ポン太は驚き、神社へ飛んで行きました。

ポン子は稲荷ずしを食べていました。毛艶が良くなり、前より元気で可愛くなりました。

「ポン子！」とポン太が呼ぶと、ポン子が嬉しそうに寄つて来ます。

「ずっと待つてたのよ。ここで暮らしましょ。神主は親切だし、美味しい物が食べられるわ」

二匹は稲荷ずしを食べ、それから緑の下で暮らすことにしました。

「あたしだって、食べ物を見つければいいよ」
ポン子が言いました。

(挿し絵・小出 茂)

